日刊 動労千葉

86. 8. 7

No. 2313

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

国鉄「分割・民営化」阻止！三里塚二期着工粉砕！

動労革マル・松崎 総評破壊へ

松崎の居直り的総評脱退を許すな

マル生四組合協議会結成総会

動労「本部」は七月二三日、全国戦長会議で総評からの脱退を「満場一致」で決定したという。そこで松崎は『脱退宣言』を発表し「もはや、ホンネとタテマエを使い分ける情勢にはない。われわれは自らのホンネの道を歩み、心ある仲間とともに全民労協加入から労働戦線統一の大道を堂々と進む」と公然と産業報国会組合として全民労協へ〝堂々と〟つき進むことを宣言したのである。

動労批判集中は当然

動労革マル松崎は脱退の理由を、①先の総評大会の役員人事で執行部は決めたことを守らず、相談もないまま動労だけを排除した。②単産、県評から動労に浴びせられた批判は国労などによって仕組まれた中傷だ。③総評の国鉄闘争方針を守ってきた動労を批判し方針に違反している国労を擁護するのは筋違いだ―としている。

まさに松崎一流のペテンである。総評脱退が、役員人事問題への抗議などでは決してない。ましてや国労を擁護する総評、県評、単産からの動労への批判がきついから、などということは理由にもならない珍奇なものだ。

たしかに、国労解体を全国大会で決定した動労へ批判が集中するのは当然であり、だから批判を受けたから脱退などとは、大ウソの大ペテンだ。

松崎の方針は、「国労の首を切って自分だけは助けてくれ、そのためには身も心も売る」と中曽根・杉浦に土下座するというもので、国鉄労働労動を自民党に売り渡すことを通して生き残る道を選択したのである。

だが、しかし、動労組合員のクビも守れないことが現実化してきたいま「大臣や総裁を大会に招待」するところまでいきついてしまった。

松崎は自民党に「四組合統一」「綱領改正」「動労解散」と忠誠度をエスカレートさせ、ついに同日選では「自民党支持」で自民党の先兵にまで動労を純化させられてしまった。

自民党に裏切り者として、さらなる証をたてるため総評脱退を決定した。

地方では混乱がおきている

動労戦長会議は総評脱退が『満場一致』で決定されたとしている。では、総評―県評―地区労の関係はどのように整理するのだ。すでに「自民党候補支持」した門司地本は県評脱退決定、しかし、米子地本は脱退しないことを決定している。松崎はここでも「各地本にまかせる」などとペテンをろうしている。必ず混乱がおこる。労働者をいつまでもたぶらかすことはできない。総評傘下の組合からの猛烈な批判に象徴されている。

松崎のペテン的、居直り的総評脱退を許すな。

動労脱退をこう見る

さきの総評大会で、動労の対応姿勢を批判した平沢全国金属書記長に、動労の総評脱退をどうみるか話を聞いた。

運動のスジは通せ

平沢氏は総評大会で「合理化提案中の組合大会に社長が来て祝辞を述べるなど聞いたことがない」と発言した。
全国金属・平沢書記長

発言で訴えたかったのは、労働組合としての原則を貫けということだ。柔軟姿勢が悪いといっているのはではない。紛争解決後に、大会で社長に頭を下げさせることはいくらでもあるが、まだ決着もついていないのに大会で社長があいさつしたり、握手したり、そういうことは民間で考えられないと言いたかったのだ。

全国金属でも百近くの支部が、全金同盟とやり合っているが、本部は本部として大局的立場に立って共闘を進めている。これが労働運動本来の姿ではないのか。国労、動労問題は、支部間の問題を総評大会に持ち込んだようなものだ。紛争中の組合が一定の状況の下で妥協するのに反対ではないが、運動のスジは通してほしい。これを通さないのは労働運動の仁義に反する。

平沢全国金属書記長

組合大会に社長が祝辞なんて とても考えられない ---週刊労働ニュース

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！